

保育内容の指導法「音楽表現」に関する一考察 ～学生の実習における子どもの表現活動を扱った 指導計画に関する意識調査を通して～

諸井サチヨ

(2019年1月17日受理)

要 旨

養成校での学びにおいては、保育を行うために必要な様々な技術を習得しなくてはならないが、造形やピアノといった実技面を磨くだけでなく、専門的な知識、幼稚園教育要領や保育所保育指針の内容の理解に基づいた指導計画案の作成も重要となってくる。保育を行う上では、表現活動は欠かせないものだが、学生の場合、実習で部分実習を実施する際や準備段階で活動内容を考え指導案を立案する際に、活動内容として製作活動を選択することが多く、「音楽に関する活動」を避けているように思われ、その原因を調査する必要があると考えるに至った。本研究では、指導計画案作成や模擬保育、園での表現活動、特に音楽表現に対する学生の意識調査を実施した。調査結果からは、音楽活動を選択したいと意欲を持っているにもかかわらず、ピアノ技術等、音楽的な技術面での不安が原因で、音楽活動を含む指導計画案作成や実際に保育の場で音楽表現活動を提案することに消極的になっていることがわかった。ピアノ技術への不安や音楽の専門的な知識不足が学生の心理に常に影響し続けていることがわかり、今後、養成校での音楽表現系の指導法の授業内容を検討していく上での手がかりとなる結果が得られた。

キーワード 模擬保育、指導計画案、評価、自信、援助

I. はじめに

保育を学んでいる学生が領域「表現」の「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」というねらいを理解し、子どもと関わるようになるために、養成校の学びとはどのようにあるべきか。音楽活動を展開するにあたって、どのような技術を身につけておかなければならないのか。筆者自身、学生と関わる中で、実習時の責任実習や部分実習等で「音楽に関する活動」を選択しない学生が多いことに日頃より疑問を感じていた。その原因はどこにあるのか。筆者の専門分野である「音楽」に関係する活動や指導について、実習後に実施した学生へのアンケート調査結

1

果をふまえながら、学生が実習等で音楽活動を選択しづらい原因をさぐりつつ、「保育内容表現とその指導法」について、今後どのような授業展開が相応しいのか考えてみたい。また大事な人格形成の時期に教え導く立場とならなくてはならない学生自身が自身の保育技術に必要なと考えていること、足りないことをどのように意識しているのかということについても探っていきたい。将来、学生が保育の場に出て、子どもたちと関わり、養成校で学んだことを指導計画案作成や実際の保育の場で生かせるようになるためには、授業でどのような支援をしていくべきなのかを考察していく。

II-1. 調査対象・方法

調査対象は、音楽関連科目を履修している学生である。

①「音楽Ⅱ」を履修している学生64名と②「音楽Ⅰ」を履修している学生のうち50人に対し実施した。①は64名全員から、②は49名から回答を得られた。

問(1)から問(10)までは、①を対象に無記名でのアンケート方式で、選択と一部自由記述の部分を設けた。問(11)、問(12)に関しては、②を対象に実施したアンケートの一部を利用したものである。

※アンケート結果については公表する旨、同意を得ている。

II-2. 学生の履修状況

S 大学短期大学部では、現在のところ、音楽科目として「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」の授業が開講されている。1年次は、主に歌唱技術とピアノ（弾き歌い）の演奏技術を習得するための内容であるが、音楽活動を実施するために必要な音楽の基礎知識も学べるように組まれている。歌唱を中心とした授業とピアノの弾き歌いを学ぶ授業がそれぞれ週に1コマずつ設けられ、学生は週に2時間、音楽関連の科目を履修している状況である。「音楽Ⅱ」では、1年次に習得した内容をさらに深め、発展させるための内容となっており、ピアノの演奏技術中心のものとなっている。「音楽Ⅱ」は選択科目となっており、音楽が好きな学生や逆にピアノをさらに1年学ばなければ問題だと自身の技術に不安を感じている学生が履修しているという現状である。そのため、「音楽Ⅱ」に関しては、履修者が1年次の1/5程度となっている。

II-3. 調査目的

実習やボランティア等で実際の園生活に関わったり、実習時に行う部分実習や責任実習の際に必要な指導計画案の作成を行ったりする場合、なぜ音楽活動を選択することに消極的になるのか、学生の考えを知り、今後の保育内容の指導法「音楽表現」の授業運営の展開に役立てるため。

Ⅲ. 調査内容

- (1) これまで実習やボランティア等に関わったことのある園では、音楽表現活動に該当する活動を実施していたか。
- (2) 園で表現活動を見学、観察した際、子どもたちの様子はどうかであったか。
- (3) 幼児期に表現活動は必要かどうか、とその理由。
- (4) 実際に指導計画案を作成する場合、どのような種類の活動を選択したか、とその理由。
- (5) 部分実習等で、実習時に任された時間に音楽活動を取り入れようと考えたか、とその理由。
- (6) 園で実際に行われていた音楽表現活動について。
- (7) 保育の場で音楽活動を実施する上で必要な知識や技術は何か。
- (8) 自身で立案した指導計画案に基づいて、授業内で模擬保育を経験したことがあるか。
- (9) 実習前に模擬保育の経験は必要だと思うか、とその理由。
- (10) 音楽表現活動を実施するために、現時点で自分自身に一番足りない能力は何か。
- (11) 保育者が音楽表現活動中に行っていた配慮にはどのようなものがあったか。
- (12) 自身が保育者になった時、音楽表現活動を積極的に取り入れようとするか、とその理由。

Ⅳ. 結果

(1) 学生は入学後に行う実習やボランティア等がかかわった園で、様々な表現活動を見学・観察してきているが、音楽表現活動を行っていたかについては、なんらかの「音楽表現活動をおこなっていた」と答えた学生が42人（67%）であった。朝の会や帰りの会などでの歌唱を含め、園活動においては、音楽表現活動が多く行われていることがわかった。

(2) 園で、表現活動を見学、観察した際、子どもたちの様子がどのようなであったかについては、「笑顔で行っていた」や「楽しんでいた」という意見が多かった。しかしながら、「楽しめていない」や「ついていけない」と感じられる子どももいたとの回答もあった。

他の回答については以下の通りである。

- ・自分の考えを形にしたり、友だちの作品を認め合ったり、生き活きとしていた。
- ・真剣に行っていた。
- ・生き活きしている時もあれば、なぜやっているのかわからずにとにかくやればいよいよという風を感じられる子どももいた。
- ・製作活動の時、全員決められた形で作っていて、個性が感じられなかった。
- ・自分の気持ちなどを一生懸命に伝えようとしていた。
- ・活動内容が子どもたちには難しかったようで大変そうに見えた。
- ・出来なくて泣いている子がいた。
- ・楽しくなさそうな子がいた。
- ・主体性を感じた。

表現活動は主体的なものなので、本来は、自分の思いや気持ちを自由に自分なりに伝えるためのものでなくてはならない。どのような活動内容であったかについては、今回の調査で詳細を把握することはできなかったが、回答にあるように、学生の目には子どもたちの様子がネガティブにうつっている場合があったようだ。体を動かしたり、絵を描いたり、歌を歌ったりという活動は、子どもたちにとって「楽しいものである」と想像しがちであるが、今回の調査では必ずしもそうではない場合もあるということがわかった。

(3) 幼児期における表現活動の必要性については、「必要だ」と答えた学生が64人(100%)であった。

100%の学生が幼児期に表現活動が必要だと考えているが、その理由としては、以下の通りである。

- ・子どもたちの創造性を豊かにするものだから。
- ・表現力が豊かになるから。
- ・表現力を育てることは大切なことだと思うから。
- ・言葉を発することの出来ない子どもでも表現活動で表現することを楽しめるから。
- ・自分の思いや考えを表に出すこと、伝えることが大切だと思うから。
- ・幼い頃から様々な経験をした方がいいと思うから。
- ・一人一人の個性がでるから。自分らしさを出せるから。
- ・好きなように自由に表せる場だから。
- ・大人になった時必要だから。
- ・遊びながらいろいろ学べると思うから。
- ・子どもにとって表現活動をしながら生活していくことが大切だから。
- ・意欲を高めるために必要だから。
- ・表現することは楽しいから。
- ・幼児期を過ぎると表現活動を取り入れることが少なくなっていくから。
- ・幼児期ならではの表現の方法があると思うから。
- ・自分以外の子の表現の仕方を学べるから。
- ・表現活動を通して人間関係も培えるから。
- ・大人になってから「表現する」ことは難しく感じるから。

アンケート結果からは、実習などで子どもたちと関わりを実際に持つ中で、幼児期における表現活動の重要性を理解していることがわかった。

4

(4) 実際に実習時に指導計画案を立案し、部分実習や責任実習を行う際、どのような種類の活動を選択したかについては、「製作に関するもの」を選んだ学生が40人、「運動や遊びに関するもの」が8人、「音楽に関するもの」が1人、「その他」が1人であった。複数を選択した回答もあり、「製作と運動や遊びに関するもの」が8人、「製作と音楽に関するもの」が1人、「製作、運動、遊び、音楽、全てに関するもの」が2人、回答なしが2人であった。

ある程度予想はできていたが、やはり、製作活動が多く、音楽に関するものを選択した学生が少数であった。それぞれの回答を選択した理由については以下の通りである。

「製作に関するもの」を選んだ理由：

- ・ホールや園庭の使用が制限されていたため。
- ・製作したものをその後の活動で使いたかったから。
- ・自分で作って達成感を味わい、作ったものを使って、遊ぶ楽しさを知って欲しいから。
- ・クラス全員で遊べるものを作りたいと思ったから。
- ・園から指定されたため。
- ・担当の先生と相談して決めたため。
- ・楽しいと思ったから。
- ・活動時間がある程度かかるから。主活動の時間が長く、時間を調整しやすかったから。
- ・製作だと時間があまることがないから。
- ・クラスの人数が多く、運動は大変だと思ったから
- ・天候に左右されたため。
- ・ハサミを上手に使える子どもが多かったから。
- ・自分で作る楽しさを知って欲しかったから。
- ・作ったものを思い出にしてほしかったから。
- ・季節に関心を持ってほしいと思ったから。
- ・授業でやったことがあるから。
- ・作ったものを使って集団で遊ぶと、仲間との人間関係が深まると思ったから。
- ・自分自身、製作が好きだから。

「音楽に関するもの」を選んだ理由：

- ・音楽にかかわる時間が幼児期には必要だから。

「運動や遊びに関するもの」を選んだ理由：

- ・自分自身、運動が好きだから。
- ・幼稚園では製作が多く、短い時間でもゲーム遊びをする機会を設けたかったから。
- ・体を動かして楽しんで欲しかったから。
- ・運動は自分の得意分野だから
- ・わかりやすいと思ったから。

「その他の活動」を選んだ理由：

- ・製作は既に数多く実施していたため、他のものの方がいいと思ったから。

全てに関するものを選んだ学生は、一日責任実習だったため、活動も複数回あり、全ての分野に関する活動を実施したとのことであった。実習では、配属されるクラスの状態やその時々に必要な活動もあり、学生自身が自信をもって行える活動を選択できるものではないことがわかった。配属クラスの担任から内容を指定される場合もあり、授業等で準備したものが採用されないこともある。

(5) 部分実習や主活動等、実習時に任された時間に音楽に関する活動を取り入れようと考えたかという問いには、考えたことがあると答えた学生は24人、考えたことはないと答えた学生は40人であり、「ない」と答えた学生が半数以上であることがわかった。(4)の調査結果でもわかるが、音楽に関する活動を選択しない学生が大変多いということがわかる。音楽以外の種類の活動の方が、学生にとっては実施しやすいという事だ。それぞれの回答を選択した理由については以下の通りである。

「考えたことがある」を選んだ理由：

- ・ 触れ合い遊びにも発展させることができるから。
- ・ 子どもたちと一緒に歌うことが好きだから。
- ・ 音楽が好きだから。
- ・ 楽しいと思うから。
- ・ 子どもたちに様々な音楽を知って欲しいから。
- ・ 音楽を楽しいと思ってもらいたいから。
- ・ 音楽は自由な表現であると知ってもらいたいから。
- ・ クラス全員で楽しめると思うから。
- ・ 季節に関する音楽にふれ、興味・関心を持ってほしいから。
- ・ 子どもがよく歌を歌うから。
- ・ リズムをとるのが好きだから。
- ・ 自分の得意分野だから。
- ・ 音楽は楽しいから。

「考えたことがない」を選んだ理由：

- ・ 方法がわからない。
- ・ ピアノが苦手だから。
- ・ 音楽が苦手だから。
- ・ 自信がないから。
- ・ 自分自身、音楽は好きで、楽しめるが“指導”となると難関だから。
- ・ 難しそうだから。

音楽活動を選択しない学生にとっては、音楽への苦手意識が大きく影響を与えているということがわかった。ある程度の学生が音楽活動を選択しようと考えたにもかかわらず、結果的に実施にはつながっていないため、そのような学生にも音楽に対する「難しい」「わからない」「苦手」など、消極的なイメージや意識が影響していることがわかった。

6

(6) これまでかかわったことのある園で実際に行われていた音楽表現活動について調査した結果は以下の通りである。

- ・ 歌唱
- ・ 鍵盤ハーモニカ演奏
- ・ リトミック
- ・ ハーモニカ
- ・ ハンドベル演奏
- ・ カスタネット、鈴などの楽器演奏
- ・ 音楽会の練習
- ・ マーチング練習
- ・ ミュージカル練習

歌唱活動が一番多く、33人の回答があった。歌唱には自由に振りをつけながら歌っていたという回答もあった。少数ではあったが、ミュージカルやマーチングなど、音楽活動としては大がかりなものを取り入れている園もあった。朝の会や帰りの会を含め、園では1年を通して季節に関する歌を行事に合わせて歌う場合も多いため、音楽活動としては、「歌唱」が身近な活動であるという事がわかった。

(7) 園での音楽表現活動を観察し、そのような場面で保育者にはどのような知識・技術が必要だと思うかについては、「ピアノの演奏技術」と答えた学生が37人、「歌唱技術」と答えた学生が23人、「音楽の専門知識」23人、「リズム楽器などを扱える知識」が32人、その他3人という結果であった。先の論文でこれまでもピアノの演奏技術や弾き歌いについては述べてきたが、音楽活動を展開するために、ピアノの技術は必須だということが、この調査で改めて明らかとなった。

(8) 自身で立案した指導案に沿って、授業内等で模擬保育をしたことがあるかとの問いには、「ある」と回答したのが13人、「ない」と回答したのが51人であった。

(9) 実習前に模擬保育の経験は必要だと思うかとの問いには、「必要だ」が37人、「必要でない」が4人、「よくわからない」が23人という結果となった。それぞれの回答を選んだ理由については以下の通りである。

「必要」だと考える理由

- ・戸惑わなくて済むから。
- ・ぶっつけ本番でできるわけではないから。
- ・経験することは大切だから。
- ・改善点が見いだせるから。
- ・前もってやっておくことが大切だと思うから。
- ・実習で臨機応変に対応できるようになるから。
- ・実際にやってみると考えていたものと違うから、経験しておくことは大切だ。
- ・よりよい保育をするために大事だと思うから。
- ・人前でやることに慣れることが必要だから。
- ・どんな風に行えばいいかを確認することができるから。
- ・少しでも多くの予想ができるから。
- ・失敗やアドバイスを実習に生かせるから。
- ・実際のイメージをつかめるから。
- ・就職した後、困らないために必要だと思うから。
- ・自分だけではわからない点があるから。
- ・他の学生がやっているのを見て、色々な遊びを知ることができるから。
- ・授業内で教員にアドバイスをもらえるから。

「必要でない」と考える理由：

- ・やっていないくても、実習では問題なくできたから。
- ・実際の子どもで行った方がいいから。
- ・子どもたちの前でやってみないとわからないことがたくさんあるから。
- ・やっていないくてもある程度はできると思うから。

模擬保育は、指導案作成後、クラス内で実施するが、授業の時間的な問題もあり、全員が十分な時間を使って経験できるわけではない。しかしながら、調査結果からわかるように、自分自身の経験や学びになるだけでなく、他の学生が行っている場面を見ることで、自身の改善点がみえてくると考える学生もいる。中には、「経験にはなるが、学生同士だとわるふざけをしてしまう場合がある」という回答を付け加えた学生もおり、クラス内だと仲の良い者同士での活動となった場合、そのような状況になってしまう。

(10) 実習等を経験し、保育者の実際の姿を学び、表現活動、特に音楽に関するものを考えた時、音楽表現活動を行うにあたり現時点で自分自身に一番足りない能力や知識は何かとの問いには、「ピアノ技術」と答えた学生が34人、「音楽を表現する楽しさを伝える力」が2人、「音楽の専門知識」が7人、「音楽を好きだという気持ち」が1人、「歌唱技術」が19人、「笑顔」が1人という結果であった。ピアノ技術では、具体的には、間違えてもとまらずに弾き続けるテクニックや大勢の前でも弾ける自信が必要だという回答であった。歌唱技術では、正確な音程で歌えること、声量、教室内に届く発声法の習得が必要だという回答であった。

(11) 実習中に保育者が音楽活動を行う上で配慮していたことを自由に記述してもらった結果、以下のようなものが挙げられた。

- ・初めて歌う曲は保育者が1フレーズずつ歌ってから子どもたちが歌うようにしていた。
- ・歌詞を紙に書いてひもでつりさげていた。
- ・歌詞が書かれた紙を貼り、歌っているところを指していた。
- ・ピアノ伴奏をしながらも後ろを振り返り、子どもたちの表情を見ていた。
- ・歌詞がわかるように2小節ずつ区切って歌っていた。
- ・子どもたちに合わせてゆっくりピアノを弾いていた。
- ・次の歌詞を先に伝えながら弾き、気持ちよく歌えるようにしていた。
- ・歌詞の意味がわかるように絵を見せていた。
- ・鍵盤ハーモニカの練習では大きな楽譜を書いて貼っていた。
- ・鍵盤ハーモニカを使う時は、保育者は子どもたちによく見えるようにお手本をみせていた。
- ・合奏の場合は、楽器別に練習して、集中できるようにしていた。
- ・分かりづらいうリズムは手拍子で伝えていた。
- ・分かりやすいように、口や手を大きく動かしていた。
- ・大きな声でなくてもいいから、きれいな声で歌うように指導していた。
- ・1番、2番の歌詞の違いが分かるように、イラストを描いたりしていた。

- ・ハーモニカの演奏では、息を吸う時は腕を上げて、吐くときは腕を下げて、わかりやすいように表していた。

(12) 自身が保育者になった時、音楽活動を積極的に取り入れようとするかとの問いには、45人が「はい」と答え、「まだわからない」が4人という結果となった。「いいえ」はいなかった。それぞれの回答を選んだ理由については以下の通りである。

「はい」を選んだ理由：

- ・子どもたちの感性を育てたいから。
- ・音楽を通してコミュニケーションが取れると思うから。
- ・表現力を培ったり、コミュニケーションをとったりするのに、音楽活動が有効だと思うから。
- ・子どもたちに楽しく園生活を送ってもらいたいから。
- ・歌う事で気持ちが明るくなるから。
- ・リズム感を育てることは大切だと思うから。
- ・楽しそうに歌う子どもたちを見たいから。
- ・歌やリズムのよい曲を通して、子どもたちと歌いながら、ダンスを一緒にしたいから。

V. 考察

今回のアンケートでは、今後の保育内容の指導法の授業運営において大変興味深い結果を得ることができた。養成校での2年間の短い学びを終え、実際に現場に出る学生が身につけなければならないスキル、必要としている知識や技術が何なのかということが理解できる調査となった。さらには、実際に指導計画案を作成したり、部分実習等で保育を実施したりする場合、音楽的な活動を避けてしまう原因も理解できた。

養成校での学びは期間が短いにもかかわらず、実際に現場に出ると1年目から担任を任せられるという場合もある。保育をしていく上で必要な表現活動はどのようにすすめていくべきなのか、実際の活動を想定した養成校での学びで、特に指導計画案作成や模擬保育はどのように進めていくべきなのかということについて、指導する側にとって、役立つ結果を得られた。

幼児期に表現活動が必要かどうかの回答では、全員が「必要だ」と答えたように、園生活で表現活動は欠かせないものである。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の豊かな感性と表現にかかわってくるのだが、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる¹⁾ために、保育者はどのように配慮や援助することが必要で、養成校での学びで音楽活動を援助するためにどのようなことができるようになっていくべきなのかということがみえてきた。

調査結果からわかるように、園での表現活動においては、クラスの子どもたち全員が同じように楽しんだり、生き生きしたりできる内容を提供することは、現状では、困難だと推察できる。アンケートには、園での表現活動で、出来ないと言って泣いている子、興味がわか

ない子がいたという回答もあり、そのような子ども達にどのように援助することができるのか、どのような援助が相応しいのかを考えていかななくてはならない。表現は主体的であるべきで、方法や結果、出来栄ばかりを気にしてしまい、「子ども主体」ということを忘れてしまったような活動にならないようにしなければならない。クラスの状態をふまえた、子どもたちにとって無理のない活動内容やねらいを設定することが重要な要素であり、出来ないことや難しいと感じて意欲がわかない子に対して、そのことを評価につなげず、それまでのプロセスや成長過程を見守ることが大切であるということだ。そのためにも幼稚園教育要領や保育所保育指針の内容を理解した上で、指導計画を立て、子どもの発達段階に沿ったねらいや活動内容を考えられるようにならなければならない。

実習では、授業で得た知識や技術をもとに、参加実習や部分実習を通して、実際のクラスでの活動を体験するが、学生自身、いつもとは違う環境ということもあり、相当緊張を強いられた状況で行うものとなる。そのような環境のもと、子どもたちと保育者の前に立ち、部分実習や一日実習を行わなければならない。準備を十分に行うためにも、部分実習や責任実習では、ある程度は自信を持ってできる内容を設定し、扱ったことのある教材などを選択できることが望ましいと言えるだろう。しかしながら、「園からの指定があった」と答えた学生も複数いるように、やはり、園の教育方針に沿って、さらには、園の年間計画や月案、週案に沿って保育をおこなっていかなくてはならないため、全てのケースで学生の行いやすい活動ばかりであるとは限らない。そのため、学生が「やってみたい」と思うことができない場合も多々生じる。大学の授業内で指導案を書く練習や模擬保育を実施していても、まったくそれと同じにはいかないということである。また、模擬保育については、授業内での実施で、実際に子どもたちの前で行うわけではない。そのため、「子どもたちの前でやってみないとわからないことがたくさんあるので、模擬保育は必要ない」と答えた学生もいた。しかしながら、実際の子どもの前でないから、「行う必要がない」ではなく、自身の作成した指導計画がどうであったか、他の学生はどのような点に着目し配慮していたか、想定していた流れやイメージと実際はどのように違ったかなど、実習で子どもたちの前で実践する前に、準備段階として模擬保育を体験しておくことは、学生にとって有益だということを学生自身にも認識してもらう必要があり、そのように感じられる授業運営を行うべきだ。特に音楽活動では、大勢の前でピアノを伴奏しながら、一人ひとりの表情や様子をうかがえる場でもあるため、授業内での活動の経験が自身の状態を振り返るいい機会となる。

実際に実習等で選んだ表現活動では、製作活動が多かったが、製作活動に関しては、運動遊びよりも展開の時間を長くともできると感じている学生が多く、こういう点でも製作活動を選択しやすくしていると推察できる。クラスの状態や年齢による発達の差異にもよるが、活動内容によっては、考えていたよりも時間が足りない、もしくは、余ってしまい、戸惑うこともあるのだろう。そのため、時間的な理由で製作活動を選んでいる学生も複数いることだろう。例えばゲーム遊び等は、何十分もそれだけを行うのでは時間がもたない。30分から40分程度の時間を運営していくには、展開の部分の時間を調節できるような内容が実習段階の学生には好まれるという事がわかった。運動遊びで楽しく活動ができて、そ

の後の展開やまとめにつなげにくく、考えていた以上に時間が余ってしまって、どうしていかわからなくなる心配もあるということもわかった。また、学生には、“幼稚園＝製作活動が多い”というイメージがあるため、製作活動に偏るのではなく、あえて運動遊びを選び、「体を動かす機会や時間を設けたい」と考える学生がいることもわかった。

今回の調査では、実習での部分実習や責任実習での主活動では「音楽に関する」活動を選択しない学生が多数いることが認識できた。音楽活動を選択しない学生の意見として、音楽に対するネガティブな印象や自身の経験に基づく音楽への“嫌な”思いが含まれていた。特にピアノに関しては、「ピアノが苦手だから」と答えた学生が9人で、ピアノの苦手意識、上手に弾けないという自信のなさが学生の心理に与える影響が大きかった。今回の実態調査は、養成校に入学して1年以上は経過している頃のものであり、ピアノにふれ始めてからもその程度の時間が経過しようとしているが、その時期でさえ、まだピアノに対して相当の不安を抱えた学生が多いということである。たとえ、養成校で過ごす2年間の間にピアノがある程度弾けるようになったとしても、そのピアノ技術を利用し、子どもたちと音楽活動を行える能力まで身につけられているのかという不安は残る。音楽活動に挑戦したい、子どもが好きな歌を一緒に歌いたいという思いがあっても、「ピアノの演奏技術」というものへの苦手意識や不安が学生の前向きな気持ちを阻害してしまっていると言える。製作活動、運動や遊び、言語など様々な活動をバランスよく行っていくべきではあるが、これらの活動に比べると「音楽に関する活動」を選択するためのハードルが大変高く、音楽＝ピアノという消極的なイメージは根強い。ピアノ伴奏を行う場合、子どもたちの方を見ながら、寄り添うように、子どもたちが歌いやすい速さで、相応しい伴奏型で援助していくことが求められる。ピアノ経験者にとってもピアノを弾く以外の事を同時に行いながらというのはかなり難易度が高いが、ピアノ初心者、もしくはゼロからスタートの学生にとって、そのような援助はさらに大変高度なものであり、2年弱の学びでは満足にできるようにならないのが現実だろう。そのため、自分の苦手分野である音楽活動は園での表現活動から選択される機会が減っていくことになるのだという結果に結びついていると考えられる。実際、就職し、数年幼稚園教諭、保育士として子どもたちと関わり、様々なことに慣れてきた頃なら、また違う結果になるかもしれないが、実習を実施する段階ではまだまだ技術面では未熟なため、自分の苦手分野である音楽活動を選択することがないということだ。ピアノ伴奏を多く使わない合奏を実施する場合も、楽器の扱い方など専門的な知識が必要となってくる。段階に応じて、分かりやすいように大きな楽譜を書いて貼るなどの工夫も必要となってくるため、音楽的な基礎知識も必須ということになる。ピアノの弾き歌いに限らず、ピアノや音楽の知識や技術が様々な部分に影響を与えているということが推察できる。そのようなスキルに自信がもてなければ、音楽表現活動に消極的にならざるを得ないということなのだろう。

今後の課題としては、授業内では、音楽活動を想定した内容で実際に行っていくべきだと考える。ピアノの弾き歌い練習についても、ただ弾いて歌うだけではなく、保育者の援助や声かけを想定し、歌詞を先取りしながら伝えていく力や子どもたちの表情や様子を見ながら伴奏していけるような訓練が必要となってくるだろう。授業時やピアノのレッスン時に実際

にそのような場面を想定しながら、短い曲であっても、細かく区切りながら子どもたちに伝える練習や歌詞を先取りしながら言う機会を多く持つべきだということだ。保育内容の指導法では、本研究の調査結果を参考にしながら、真の実践力を高められるような授業内容を提供していきたい。音楽に関する活動の指導計画案作成の準備段階として、まずは学生の音楽、特にピアノ演奏に対する不安などの意識を変えていけるような授業での取り組みが大切である。技術、知識にある程度自信がついた上で指導計画案を作成し、模擬保育等に活用できれば、事後の振り返りも質のよいものにしていくことができる。さらには、「幼児期のおわりまでに育ってほしい姿」と表現活動を結び、今後は幼児の表現活動における評価の考え方についても研究を進めたい。また、授業内での取り組みを改良し、学生の不安材料を排除できるよう、引き続き音楽表現の指導法について研究を深めたい。

引用文献

- 1) 無藤隆 10の姿プラス5・実践解説書 p6

参考文献

- 1) 田澤里喜他 保育・幼児教育シリーズ 表現の指導法
- 2) 宮川萬寿美他 保育の計画と評価ー豊富な例で1からわかる
- 3) 鈴木みゆき他 乳幼児教育・保育シリーズ 保育内容表現
- 4) 三森桂子他 新版実践 保育内容シリーズ5 音楽表現
- 5) 無藤隆他 10の姿プラス5・実践解説書
- 6) 幼稚園教育指導資料第1集 指導計画の作成と保育の展開
- 7) 吉永早苗 子どもの音感受の世界